

主体的に考えながら表現することのできる生徒の育成 一意欲を高める導入と振り返り活動の充実を通してー

- I 研究主題設定の理由
- II 研究構想
- III 研究の実際
- IV 研究の成果と課題
- V おわりに

研究の概要報告

1 県内の自主的な研究活動の取組状況

外国語教育の研究においては、小中高すべての学校段階において、「言語活動を通して」コミュニケーションをはかる資質・能力を育成することをめざし、各学校現場で実践研究が精力的にすすめられている。本年度の教育研究愛知集会でも、各分会の実践者による挑戦的で創意工夫にあふれた20本の研究レポートが提出された。

相手意識のある言語活動にとりくみ、主体的に学習にとりくむ態度の育成をめざす実践が、小中の双方で多く報告された。また、ICT機器を活用し、自信をもって思いや考えを相手に伝えたりするための工夫など、GIGAスクール構想で設置された端末の有効活用に関する事例も多くみられた。さらに、小中のつながりを意識した単元構想や言語活動の設定を行い、系統性を重視した小中連携の実践についても報告が行なわれた。

2 今次県集会でみられた主要な課題

本次の県集会で提出されたレポートは「主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のあり方」「コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方」「思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方」と大きく3つの実践に分類される。

「主体的に学習にとりくむ態度を育む指導のあり方」では、ポートフォリオを活用し生徒にゴール活動のイメージをもたせ主体的に学習にとりくませる実践や、マインドマップやスマールトークを継続的に活用し、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる実践が報告された。

「コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方」では、ほめほめワードやコミュニケーションスキルを意識させ、外国語に対する不安を軽減する実践や、生徒が切実感や相手意識をもってコミュニケーションできるよう、やり取りを継続させるための工夫などが報告された。

「思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方」では、話す内容や表現を深めるためプランニングタイムを設け、新たに言えるようになった表現をステップアップシートにメモさせる実践や、ペアやグループ活動を効果的に取り入れ、伝えたいという思いを原動力に、いきいきと英語でコミュニケーションする実践報告があった。

3 今後の課題

2025年度は小学校の検定教科書もリニューアルされ、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、コミュニケーションをはかる基礎となる資質・能力を育成することがいっそう求められる。わたくしたちは、子どもたちの学びの実態を把握し、各学校がめざす子ども像を実現できるよう、豊かな外国語教育をつくっていく必要がある。今次の研究の成果と課題をふまえ、子どもたちのゆたかな学びを保障するよう実践研究を続けていきたい。

(鈴木由季子・加藤拓由)

報告書のできるまで

わたくしたちは、それぞれの学校で、子どもたちの健やかな成長を願い日々の教育活動にとりくみながら、自主的・主体的に実践研究を行っている。この報告書は、「学びの質を追究し、子どもたち一人ひとりの意欲を大切にしたい、学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程編成活動をすすめる」という愛知県の教育研究活動の重点項目をふまえ、継続して行ってきた実践の成果をまとめたものである。単組ごとの研究集会の分科会における実践報告と研究協議を経て、県の研究集会の分科会には22本のレポートが提出された。「わかる授業・楽しい学校」をめざし、子どもたち一人ひとりの主体的・対話的で深い学びを実現するための工夫がどのレポートからもみられた。参加者の間では、意見交換や質疑応答が積極的に行われ、助言者の先生方からは、的確なご指導やご助言をいただき、充実した研究集会になった。

助 言 者	加藤 拓由 (岐阜聖徳学園大学)	鈴木由季子 (尾張旭・東栄小)
教育課程研究委員	鈴木 啓仁 (豊 川・一宮東部小)	楠崎 寛人 (豊 田・野見小)
	加藤 直樹 (稲 沢・明治中)	大脇 芳則 (名古屋・天神山中)
	鈴木ひと恵 (名古屋・若水中)	松浦 昂平 (春日井・鷹来中)
	佐藤 公哉 (稲 沢・大里東小)	青木 龍一 (一 宮・萩原中)
	白澤 義顕 (蒲 郡・三谷中)	

I 研究主題設定の理由

近年、グローバル化が急速に進展し、外国語によるコミュニケーション能力は、生涯にわたるさまざまな場面で必要となることが想定される。2020年度及び2021度に全面実施された学習指導要領では、外国語によるコミュニケーション能力をよりいっそう高めていくことの重要性が述べられている。一方で、学年が上がるにつれて生徒の学習意欲に課題が生じていることがあげられている。実際、日頃の授業を見てみると、意欲的に表現活動にとりくむ生徒がいる一方で、英語に苦手意識をもち、表現活動を楽しむことができない生徒も見受けられる。

そこで、主体的に考えながら表現することのできる生徒の育成をめざし、特に、英語学習への学習意欲の向上を中心としたとりくみをすすめていく。

研究をすすめるにあたり、5月中旬に事前アンケートを実施した【資料1】。

「英語の授業は好きですか」の問いに対しては、半数以上の生徒が苦手意識をもっていることがわかった。また、英語を使って「聞く」「発表する」「書く」「話す」といったどの技能においても苦手意識が高い傾向があることがわかった。「発表する」ことについては、7割以上の生徒が苦手意識をもっていることが明らかとなった。英語が苦手な理由について聞いてみると、「発音がわからない」「言いたいことはあるけど、英語がわからない」「自信がない」などの理由があげられた。そうした理由から、生徒の英語学習への意欲がそがれている現状がある。また、さまざまな単語や表現を学んでいるにもかかわらず、学習前と学習後で自身がわかったことやできるようになったことを認識することができていないことから自信につなげられていないのではないかと考えた。

そこで、本研究では、生徒の英語に対する学習意欲を高めるための授業の導入、振り返り活動の工夫に焦点をあてて研究をすすめていく。

II 研究構想

1 めざす生徒の姿

本研究でめざす生徒の姿を次のように設定した。

- ① 意欲的に英語学習にとりくもうとする姿
- ② 自信をもって主体的に英語で表現しようとする姿

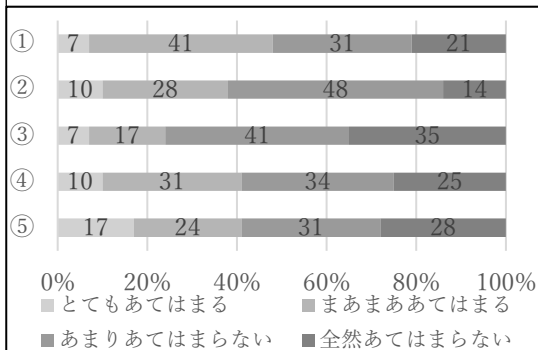
2 研究仮説

研究の仮説を次のように設定した。

- (1) 単元導入時に単元を見通すことができるよう工夫をしたり、授業の導入でのインプット活動で英単語を定着させることができるよう、興味関心がもてる活動を行ったりすることで、意欲的に英語学習にとりくむようになるであろう。
- (2) 学習した表現を蓄積できるようにしたり、次への意欲につながる振り返りをしたりして、学びが見える化することで、自信をもって主体的に表現することができるようになるであろう。

【事前アンケートの質問項目】

- ①英語の授業は好きですか。
- ②英語を聞くことは好きですか。
- ③英語で発表することは好きですか。
- ④英語で書くことは好きですか。
- ⑤英語を話すことは好きですか。



【資料1】事前アンケート結果

3 研究のてだて

めざす生徒の姿に迫るため、次のようなてだてを設定した。

(1) てだて I 「英語に対する学習意欲を高めるための授業の導入の工夫」

① 単元導入時での単元の見通しをもたせる工夫

単元のめあてを設定し、単元のゴールを明確にした単元計画を作成し、一単元の見通しをもてるようにする。

単元終末活動には、生徒が「話してみたい」と思える課題を設定し、単元導入時に教員が書いた1枚ポートフォリオを提示しながらデモンストレーションを行うことで、その単元でどのような表現を身につけていくか生徒が見通しをもてるようにする。

② 授業の導入での英単語を定着させるインプット活動の設定

授業の導入時の帯活動として、単語のインプット活動を行う。単なる発音練習を行うのではなく、楽しくインプットできるような活動にして、英語学習への意欲を高める。このときに取り扱う英単語は単元で必要となる語や単元終末活動で使用する語にし、単元終末活動の際に自信をもって学習した英単語を活用できるようにする。

(2) てだて II 「学びを見える化した1枚ポートフォリオ (One Page Portfolio) の活用」

1枚ポートフォリオ (以下OPP) を用い、単元内での学びを見える化する。OPPの左側を「表現の蓄積」として学習した表現を蓄積していくスペース、右側を「振り返り」として授業の振り返りを記入するスペースとすることで、単元内での学びを1枚のシートに見える化する。生徒自身がわかったこと、できるようになったことを明確にすることで自信へとつなげる。

III 研究の実際

《平和中学校の実践》(第2学年)

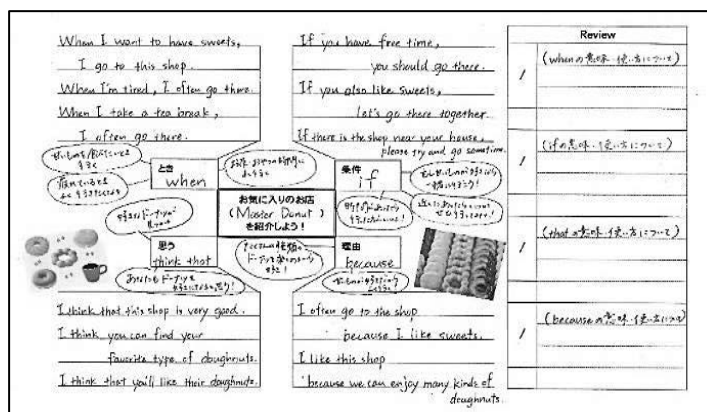
1 一次実践

(1) 実践内容

① てだて I 「英語に対する学習意欲を高めるための授業の導入の工夫」

ア 単元導入時での単元の見通しをもたせる工夫

「お気に入りの店を紹介しよう」という単元のめあてを設定し、単元のゴールを明確にするために、導入時に教員がお気に入りの店の紹介を行った。その際、店を紹介するために必要な表現を蓄積することができるOPPを提示し、学習内容とすすめ方を



【資料2】 教員のお気に入りの店の紹介用OPP

確認した。【資料2】は、教員のお気に入りの店の紹介のときに生徒に示したOPPである。英語で紹介を聞くだけでなく、OPPを見ることで聞くことの助けとなるようにした。

イ 授業の導入での英単語を定着させるインプット活動の設定

毎時の導入では、英単語のインプット活動を行うために単語チェックを行った。また、スモールトークは、新しい文法事項の定着をはかったり自己表現に対する抵抗感を減らしたり

		Name	
Unit 2 セルフチェック用 英語→日本語と声に出して練習！聞いていっばい！書いてどんどん覚えよう！			
1	作	change	変わる、変化する
2	知	world	世界、世界中の人々
3	種	kind	種類、やさしみ
4	作	recipe	調理法、レシピ
5	作	pilaf	ピラフ
26	作	chef	シェフ、料理長
27	作	flour	小麦粉
28	作	thick	濃い、どろっとした
29	作	come from	…から来ている
30	作	for sale	売りの

【資料3】単語チェックシートの一部

するために、学習した次の授業の導入で行うことができるようにした。

単語チェックでは、教科書の新出語句をインプットすることで語彙を増やし、自分が表現したい内容を書き表すことができることをめざした。【資料3】の単語チェックシートを活用して、全体練習と個人練習を行ったあとで、ペアチェックにとりくむようにした。すべての単語をチェックするために、時間制限は設けなかった。ゲーム感覚で楽しんでとりくめるよう、ルールを設けた【資料4】。セルフチェック用にはカタカナで発音を書き込んでもよいこととし、覚えた単語からカタカナを消して自分の成長を実感できるようにした。

- <ペアチェックのルール> A:チェックしてもらう生徒 B:チェックする生徒
- ・ Aは順番通りかランダムにチェックしてもらうかを決める
 - ・ Aは今回の語句のみか、前回までの語句も含めてチェックしてもらうかを決める
 - ・ Bはセルフチェック用を見て、意味を言う
 - ・ Aはペアチェック用を見て、Bが言った意味の英単語を発音する
 - ・ テンポよく行う
(A:わからない語句は潔くパス/B:3秒待っても発音できなかつたら次にすすむ)
 - ・ Aはチェック終了後、Bと確認しながら正しく言えた語句にチェックを付け達成度を確認する

【資料4】単語チェックのとりくみのルール

② てだてII「学びを見える化したOPPの活用」

新出の文法事項を学習したあとに、自分が伝えたいお気に入りの店について書き表す時間を設定した。OPPの「表現の蓄積」を活用し、学習した文法事項を用いて英語で表現させた。まずは、本単元で学んだことをいかすために自分でとりくむ時間を設けた。タブレット端末を使用してもよいこと、単語レベルでの検索をすることなどのルールを決めた。その後、学び合いができるようにグループ活動を取り入れた。自分だけではうまく表現できなかったことを協働的に解決していくことで、学びを深めることができるようにした。また、学習内容を振り返りながら表現活動にいかすことができるよう、学んだことや気をつけたいことなどについてOPPの「振り返り」に書くようにした。

(2) 結果と考察

① てだてⅠ「英語に対する学習意欲を高めるための授業の導入の工夫」

ア 単元導入時での単元の見通しをもたせる工夫

単元終末活動のデモンストレーションを行う際に、教員が作成したOPPの「表現の蓄積」を提示したことで、聞くことへの抵抗を減らすことができた。苦手な生徒も、教員のOPPを見ながら、英語での紹介を一生懸命聞き取ろうとする姿がみられた。また、OPPから本単元でどのような表現を学ぶのか確認することができた。「『…だから好きです』とか『…のときこの店に行きます』とか言えるってことだ」と発言する生徒もあり、今後の見通しをもたせることができた。

イ 授業の導入での英単語を定着させるインプット活動の設定

単語チェックは隣どうしのペアでとりくんだ。教え合いができるよう、上位生徒と下位生徒がペアになるように意図的な座席配置を行ったことで、英語に苦手意識がある生徒もペアの生徒に教えてもらいながらとりくんでいた。

単語チェックを繰り返すうちに、自分が苦手な発音の英単語を事前に確認した上で全体練習にとりくんだり、個人練習で教員や友人に発音の仕方を尋ねたりするなど、主体的にとりくむ生徒が増えた。ペアチェックのルールを設定したことで、テンポよく3秒以内に発音するというゲーム的な要素から生徒のとりくみへの意欲を感じた。言えない英単語があると「何て言うんだっけ」と思い出そうと考え込んだり、「さっきまで言えていたのに」と悔しがったりしていた。言えなかった悔しさがあることで生徒自身の印象にも残り、次回とりくむときには「これは前言えなかった単語だから、今日は言えるようにする」などと目標をもってとりくむことができた。また、「だんだん覚えてきたから次はランダムでやってみようかな」と挑戦する生徒もいた。しかし、単語チェックシートには新出語句しか取り入れていなかったため、単元終末活動で使う英単語が定着しておらず、学びをいかすことができたという実感をあまり得られなかった。

② てだてⅡ「学びを見える化したOPPの活用」

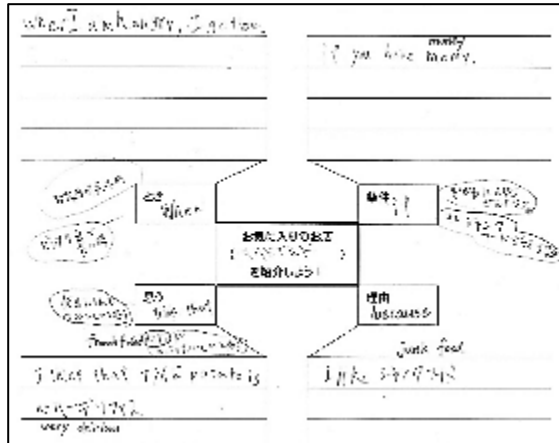
新出の文法事項を学習したあとに振り返りを記入することで、生徒自身が学んだことを整理することができた。振り返り活動を続けるうちに、学んだことを詳しく書くことができるようになったり、既習内容と比較して共通点や相違点などを見つけたりする生徒が増えた。振り返りの回数を重ねるごとに、記述内容の質を向上させることができたと考える。【資料5】

OPPの「表現の蓄積」については、振り返り記述後に記入するよう計画していたが、十分に時間を確保してとりくませることができなかった。次時に行うと、学習した文法事項について忘れてしまっている生徒が多かった。学習直後にとりくませ、学習した表現を活用して少しでも定着をはかることができるようにする必要があった。生徒にとっては、ターゲットとなる文法事項を使った内容を考えることが難しく、本当に伝えたい内容を伝えることができていなかったようである。伝えたいことを自分の知っている表現で言い表すことに難しさを感じている生徒も多かった。

Review	
5/1	このとき、このとき見ると、 2つは when をつかって、 という感じがした。
5/2	Hi も LO のとき、 のとき、 かいて、 when と同じで、 かいて、 when と同じで、
5/3	that は 構造的で、 think that と、 hope that だて、
5/4	because も when、if と同 じ、 理由を、
5/5	理由を、

【資料5】生徒の振り返り

一方、普段はまったく英文を書くことができない生徒もいるが、活動にとりくもうとする姿がみられた。教員のOPPの「表現の蓄積」から自分が伝えたいことと近い内容の表現を見つけて書き写していた。また、書きたいことを思いつくと、まずは日本語で書き、同じグループの生徒や教員に質問をして少しずつ英語で書き加えるなど、意欲が感じられた【資料6】。



【資料6】英語が苦手な生徒のOPP

2 二次実践

(1) 実践内容

① てだてI「英語に対する学習意欲を高めるための授業の導入の工夫」

ア 単元導入時での単元の見通しをもたせる工夫

「自分の将来の夢を伝えよう」という単元の前あてを設定し、単元終末活動での理想の姿を示すために、導入時にOPPを見せながら教員の将来の夢についてデモンストレーションを行った。

生徒が本当に伝えたいことを表現することができなかったという一次実践の反省から、

まずは生徒自身が将来の夢についてじっくりと考える時間を設け、日本語でマッピングをさせた【資料7】。職業だけでなく、将来やりたいこと、ほしいものなど、日本語で自由に書かせた。書きすすめる中で、「何のために」「何をすべきか」

「何をしてどんな気持ちになるか」などの声掛けをし、本単元で学習する文法事項を含む内容も交えながら書き加えていけるようにした。



【資料7】生徒の将来の夢のマッピング

イ 授業の導入での英単語を定着させるインプット活動の設定

一次実践の帯活動と同様、ペアでの単語チェックを行った。本単元では、教員が示した新出語句だけでなく、単元終末活動

21	sentence	文	43	through	くわす、つう
22	knew	knowの過去形	47	self-satisfaction	じぶんじゆんじゆん
23	deep	深い	48	popularity	じやうじやう
24	knowledge	じゆん、ちゆう	42	restoration	じやくふ
25	develop	ちゆうじやうさせる	52	convince	しんじやく

【資料8】単語チェックシートの一部

う単語チェックシートに空欄を用意し、生徒自身が将来の夢の発表で使いたい語句を追加できるようにした【資料8】。

表現の蓄積の時間に、自分の将来の夢を伝えるために必要な語句を単語チェックシートに書き加えた。単語チェックでは、追加した語句も含めてペアでチェックを行った。ペア生徒に自分の単語チェックシートを渡し、英単語が正しく発音できているか確認してもらった。互いに単語チェックシートを見合うことで、自身とペア生徒の語彙の充実をはかることができたようにした。

② てだてII「学びを見える化したOPPの活用」

単元の導入でとりくんだ日本語でのマッピングを参考に、学習した文法事項を活用して自分が伝えたい内容を英語で表すようにした。一次実践では、OPPの「表現の蓄積」にとりくむ時間を十分に確保することができなかったため、本単元では、本文の読み取りは重要な部分のみ取り上げて、表現活動に時間を割いた。個人の活動時には、自分が伝えたい内容を本単元で学習する文法事項を使って言い表すようにした。初回は教員が例をあげて説明し、個人でとりくんでからグループ活動の時間にした。既習の文法事項を活用して表現する時間を確保することで、学んだことを活用できたという生徒が実感できるようにした。それぞれの授業で学んだことを次にいかすことができるように、文法事項を学習した授業ではOPPの「振り返り」を記入し、本文の読み取りをしたあとは表現の蓄積を行うよう、計画を立ててとりくんだ。

(2) 結果と考察

① てだてI「英語に対する学習意欲を高めるための授業の導入の工夫」

ア 単元導入時での単元の見通しをもたせる工夫

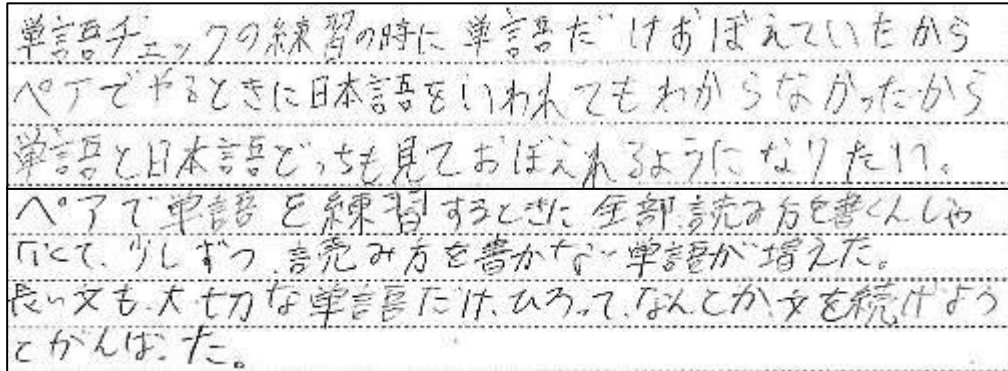
単元の導入時に日本語マッピングにとりくんだことで、英語で書けそうなことを書くのではなく、自分が本当に伝えたいことを表現することができた。一人ひとり個性あふれる内容となり、生徒自身もより「できた」という実感を得ることができたようだった【資料9】。伝えたいことを表現できた、相手に伝わったということが生徒自身の自信や次への意欲につながった。

日本語マッピングで書きたることをじゆんじやうでなした
表現の仕方でも表すことかでき、自分でも英語で表現
するこのでるものかたかたなと感じてうれしかった。

【資料9】表現活動に関する生徒の振り返り

イ 授業の導入での英単語を定着させるインプット活動の設定

単語チェックを継続して行うことで、英単語の定着をはかることができた。生徒自身も、「だんだん単語が読めるようになってきた」「覚えた単語が増えてきた」と、成長を実感していた。【資料 10】は、英語が苦手な生徒の振り返りである。成長を実感できたことで、次への意欲にもつながったと考える。



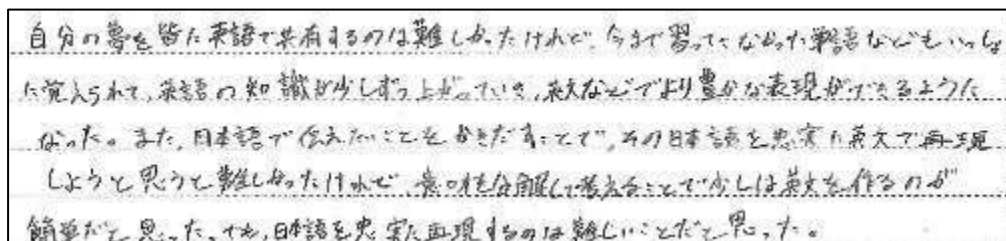
単語チェックの練習の時に単語だけおぼえていたから
ペアでやるときに日本語をいわなくてもわからなかったから
単語と日本語どっちも見えておぼえるようになった。17。
ペアで単語を練習するときに全部読み方を書くしや
らなくて、少しずつ読み方を書かせる単語が増えた。
長い文も大抵かな単語だけひらいて、なんとか文を続けよう
とがんばった。

【資料 10】インプット活動に関する生徒の振り返り

追加した語句もチェックしてもらうことで、自分が使いたい表現をしっかりと覚えることができ、単元終末活動でいかすことができた。また、互いに追加した語句をチェックし合うことで、「その単語は初めて知った」「つづりはそうやって書くんだ」などと、ペア生徒も学ぶことができていた。しかし、発音チェックとしては、ペアの生徒が読み方を知らない場合もあり、生徒どうして発音が正しいかの判断をすることが難しかった。事前に、タブレット端末で確認する時間を設けるなどの工夫が必要だった。

② てだてⅡ「学びを見える化したOPPの活用」

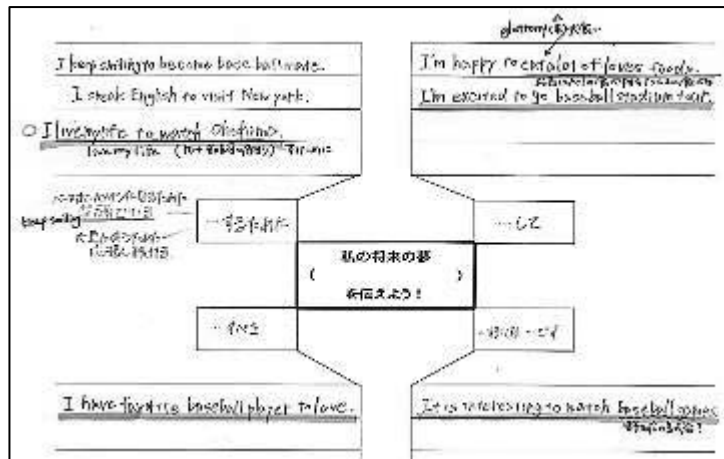
表現を蓄積する時間を確保したことで、学んだことをすぐに活用することができ、生徒が「わかった」「できた」と実感することができていた。【資料 11】は、生徒が記述した単元の振り返りである。伝えたいことを生徒自身が知っている表現に言い換えることは難しく、個人での活動時にすすめられる生徒は少なかった。多くは教員のサポートが必要だったが、グループ活動の時間を増やしたことで、どのような表現に言い換えるとよいかを協力して考える姿がみられた。言い換えができると一人で表現することができる生徒もいた。



自分の夢を皆に英語で共有するのは難しかったけれど、今が習っている単語をいかに
か覚えられて、英語の知識が少しづつ上がっている、大きな喜びより豊かな表現が出来るように
なった。また、日本語で伝えたことをおぼえて、その日本語を忠実に英文で再現
しようと思うと難しかったけれど、意味を正確に考えることで少しは英文を作るのが
簡単かと思った。でも、日本語を忠実に再現するのは難しいことだと思った。

【資料 11】表現活動に関する生徒の振り返り

OPPは毎時間回収し、朱書きを加えた。英文の添削だけでなく、書けていない生徒には日本語での言い換えを示しておく、次時に振り返りを書いたあとで「表現の蓄積」に付け加える生徒もいた。【資料12】は、朱書きをもとに、生徒が修正したり書き加えたりしたOPPの「表現

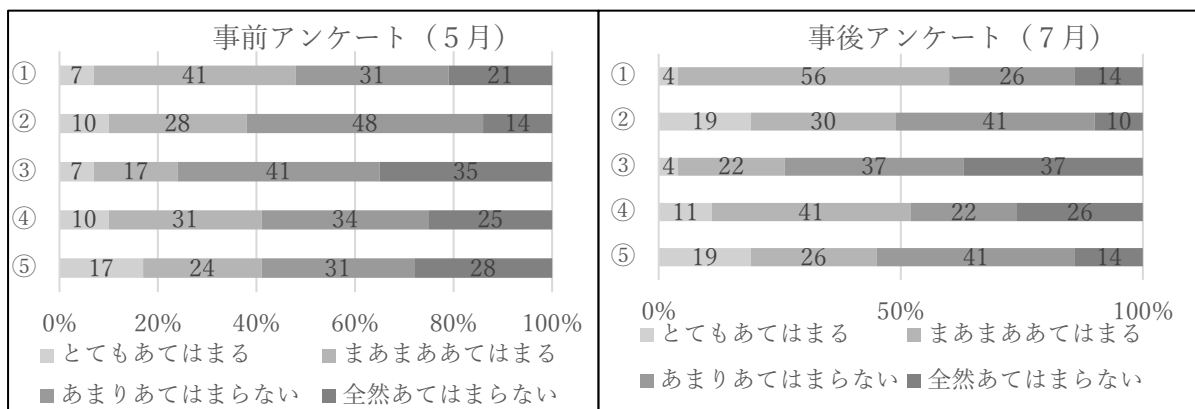


【資料12】朱書きを加えた生徒の表現の蓄積

の蓄積」である。伝えたいけれど表現できない内容についても、表現を蓄積する中央のスペースに日本語で書いたり質問したりするなど、「表現したい」という意欲的な姿を見ることができた。

IV 研究の成果と課題

二次実践終了後、事前アンケートと同じ内容の事後アンケートを行った【資料13】。



【資料13】事前事後のアンケート結果

1 研究の成果

- 単元の導入時に教員がOPPを提示したことで、「聞く」ことへの抵抗を減らすことができた。英語が苦手な生徒もOPPを見ながら一生懸命聞き取ろうとする姿がみられた。OPPから単元でどのような表現を学ぶか確認することができたことで、今後の見通しをもって学習にとりくむことができ、学習意欲の向上につながった。
- 単元の導入時に日本語マッピングにとりくんだことで、生徒が本当に伝えたいことを英語で表現することができた。伝えたいことを表現できたり、相手に伝わったりしたことで、生徒自身の自信や次への意欲につながった。
- 授業の導入時のインプット活動で英単語の定着をはかった際に、ルールを設定してゲーム感覚でとりくませたことで、生徒が楽しんでインプット活動にとりくむことができた。また、前時で言えなかった英単語を言えるようにしようと努力する姿がみられた。さらに、自分が単元終末活動で使いたい英単語をインプット活動で追加できるようにしたことで、必要な英単語の定着をはかることができた。英単語の定着をはかったことで、

生徒の自信につながった。

- OPPの「表現の蓄積」を書く際に、グループ活動を取り入れたことで、グループ内で協力して考える姿がみられた。言いたいことはあるが表現できないという生徒も協力して考えたことで、自分が本当に言いたいことを表現することができた。言いたいことを表現できたことで、学習意欲の向上につながった。

2 研究の課題

- インプット活動をペアでとりくんだが、ペアによっては正しい発音がわからず、ペアの発音が合っているかわからないことがあった。また、二次実践では、生徒が使いたい英単語を自由に書き加えられるようにしたことで、英単語の幅が広がり、ペアの書いた語の発音がわからず、発音が正しいかどうか判断が難しかった。活動に入る前に正しい発音をペアが知っておく必要があった。
- OPPの「表現の蓄積」に単元終末活動で必要な表現を書き加えていったが、単元終末活動の際にOPPに頼り切ってしまう、OPPを見ながらの発表になってしまう生徒がいた。暗唱したものを読むだけの活動にならないように、スモールトークやアウトプットする場面を計画的に取り入れる必要があった。
- インプット活動やOPPの「表現の蓄積」や「振り返り」を書くなどさまざまなたでを講じたが、1時間内の授業内で各活動に十分に時間を取ることができなかった。授業計画をする際に、活動の精選や時間配分を考え、各活動の時間をしっかり取れるようにしておく必要があった。

V おわりに

本年度は、生徒の英語に対する学習意欲を高めるための授業の導入、振り返り活動の工夫に焦点をあてて研究をすすめた。単元導入時に生徒に単元の見通しをもたせる工夫や、授業の導入時に帯活動としてインプット活動を取り入れた。また、OPPを用いて表現を蓄積したり、振り返りを記入できるようにしたりして学びの見える化をはかった。今後は生徒の英語学習への意欲をさらに高めるためのたでを講じ、学習した表現を意欲的に活用し、発表できる生徒を育成していきたい。